

水分の過剰や停滞に広く用いられてよいことを示している。

今回、歯科医学と水毒の関連性について、漢方医学的考察を試みた。

32) 「後法興院記」に表れる丹波親康の事跡について

Chikayasu Tamba described in medieval diary "Notino Hokoin ki"

鶴見大学歯学部 戸出 一郎
大熊 毅
佐藤 恭道
別部 智司
雨宮 義弘

Ichiro Tode, Takeshi Ohkuma, Yasumiti Sato, Satoshi Beppu and Yoshihiro Amemiya, Turumi University, School of Dental Medicine

この度、口中科の祖と言われる丹波親康について調べる機会を得たので、その結果を報告する。

親康の事跡を調べるために、親康と極めて親しい関係にあった近衛政家の日記「後法興院記」（以下「院記」）を披見して、その中に記された親康の人となりや、医業の内容、あるいは貴族社会における生活状態などを調査した。

「院記」の著者近衛政家は近衛家の初代とされる基実から13代目に当たり、室町時代、五摂家の公卿として内大臣、右大臣、左大臣を歴任し、文明11年（1479年）から閑白となり、長享2年から太政大臣を勤め、准三后に任じられ、永正3年（1506年）62歳で他界した。後法興院は近衛政家の法号である。

「院記」は寛正7年（1466年）政家21歳の時から永正2年（1505年）61歳に至る40年間にわたる日記である。

調査に当たっては、政家の自筆本に基づいて、これを活字体として「続史料大成」の中で公開されたものを資料とした。

「院記」の書かれた時代には応仁・文明の大乱が相次ぎ、武家勢力の台頭とともに公卿社会が崩壊していったため、政家の生活も波乱に満ち、「院記」には当時の政治・軍事・宗教・伝統行事・家領の

経営・交際・趣味等幅広い分野にわたって貴重な記録が残されている。

「院記」に親康の名前が最初に表れるのは応仁元年（1467年）6月25日で、応仁の乱の緒戦に当たり、細川勝元の軍勢に親康の宿所が焼き払われたことである。

同年7月6日、政家は戦乱を避けて宇治へ疎開したが、住居を失った親康は政家に連れられて宇治へ赴いた。

宇治では同年11月から、近衛家で毎月催されている和歌会が始められた。政家は和歌や連歌をよく愛し、歌人としても一流の人であった。注目すべきことに、親康にはその方面の才能があったようで、しばしば月次和漢会や連歌会に列席し、世話役や頭役、発句の担当など重要な役割を負わされている。これらの会には高位の貴族や最高の歌人、あるいは連歌では宗祇のような宗匠、又、肖柏・玄清といった当時最も優れた達人が参加している。

次に親康の医師としての事跡を見れば、医師として「院記」に表れるのは、全49回の中13回に過ぎない。その内容を列記すれば次のとおりである。

1. 文明16年、政家の風気・虫気
2. 文明16年、禅閣の痢下通、丹波頼秀とともに召される
3. 文明16年、小童の風気、5日後竹田周防に転医
4. 長享2年、景陽軒の風気
5. 長享2年、禅閣の三日熱、10日後、竹田周防に転医
6. 長享2年、石蔵殿の痢病、8日後竹田周防に転医
7. 長享2年、禅閣痢病、2回往診
8. 明応2年、実相院准後の虫気
9. 明応5年、瑞光院不例
10. 明応9年、2歳小女風気、資直、清侍従とともに診る
11. 文亀元年、政家風気、明重朝臣並びに清侍従とともに診る

上記の3・5・6に見られるように、親康は度々政家から診療の機会を与えられたが、しばしば治療に失敗し、その度に竹田周防（元慶）やその他の民間医によって後始末がなされていた。

1例をあげれば、文明16年9月14日、政家の子供が風気を病んだので親康に処方させた。ところが17日にはかえって病状が悪化し、19日になっても良くならないので竹田周防に診せたところ、痼病だと言って処方を出し、そのため24日ごろから良くなりはじめ、30日に至ってほとんど回復した。

和氣・丹波の医師の中で、「院記」にその名が表れる回数は親康がとびぬけて多く、医療の記録も彼が最も多い。これを見れば親康が如何に政家から目をかけられていたかが察しられる。しかし親康は医師としては政家の期待に答える事はできなかった。和氣・丹波の医師たちの中で真に信頼を得ていたのは半井明重ただ一人であった。そして宮廷医たちの無能を補ったのは竹田周防・法印・宰相並びに清法眼・清侍従・上池院・眼科医芝田・糸法師らの民間医であった。中でも政家が最も信頼していたのは竹田周防であったが、彼は明応6年に死亡した。それ以後は半井明重・竹田宰相・清侍従・上池院・糸法師らが診療に当たっている。

和氣・丹波の医師たちは深く貴族社会の中に入り込んでいたが、医師としての業績は振るわなかったように思われる。そのなかで丹波親康は近衛政家には家族のように愛され、しばしば和歌や連歌の席に連なっているが、医師としての手腕は劣っており、その業績はまことに少なかったように思われる。

また親康は口中科の祖として兼康とともに名高いが、「院記」に見るかぎり口中に関する病は一例もなく、彼が口中療治をした記録は全く見いだせなかった。

33) 医療とアメニティの関連性の考察 (その2)

Studies in the Amenity and Medicine (Part 2)

医の博物館 ○西巻 明彦
陶 栗嫻

Akihiko Nishimaki and Suxian Tao, Museum of Medicine and Dentistry

現代、日本においてQOL (クオリティ・オブ・ライフ, quality of life) という用語が繁用されて

いる。この用語は、医療界のみではなく、建築関係、環境関係でも使用されている。QOLは、生活の質、生命の質、生き方の質など多用の日本語訳が存在している。永田勝太郎氏は、「ライフは、『生命』と訳するのが妥当であろう。この中には、生命の尊さ、生きることの意味、価値感、生命観、人生観、死生観、世界観までも包括されている。」と述べている。

QOLは、Bechによれば、1964年ジョンソンアメリカ大統領が、演説の中で使用したことにより、社会政策、保健医療政策に使用されたと言われている。

日本においてQualityという概念が注目されるようになったのは、OECDの対日環境政策審査による指摘により始まったと言われる。そのOECD対日審査報告書では「Japan has many won pollution abatement battles but has not won the war for environmental quality—日本は、数多くの公害防除の闘いを勝ちとったが、環境の質を高めるための闘いでは勝利をおさめていない。」と述べている。同時に「『外見上』社会的要請と呼ばれるものは、公害防止に向けられていたが、真の社会的要請は、アメニティを増大することにあつたのである。」と記している。しかしながら、当時の日本において、アメニティという概念がまったく理解されずにいたことも、事実である。本来、QOLもアメニティも、ほぼ同義語であり、哲学的概念の強い用語である。医療で使われるQOLは、どちらかと言うと、個人の生活能力と言う狭い範囲で使用されていることが多い。現代では、QOLをさらに進めたQOS (quality of sense, 趣きの質) も提唱されるようになった。

今回、アメニティの歴史的変遷をたどりながら、医療とアメニティの関連性について考察を試みた。

34) 日本における解剖図の「眼差し」に関する研究 (その4)

Studies on the Eye of Anatomical Drawing in Japan (Part 4)

医の博物館 西巻 明彦

Akihiko Nishimaki, Museum of Medicine and Dentistry